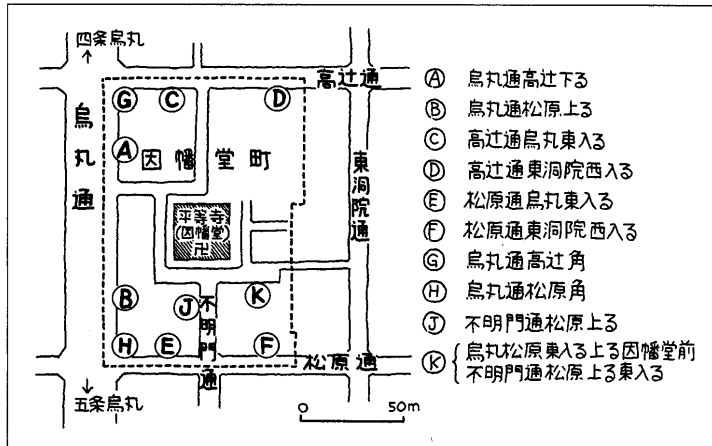


西堀川通御地下(さがる)西三坊堀川町五二一

- A 西堀川通——この南北通りに面している。
- B 御地下る——御地通との交差点から南下する (北上の場合は「上る」)。
- C 西三坊堀川町五二一——座標系とは別に定められたこの町名に所属している。



京都旧市街の住所の表示 (今尾恵介『住所と地名の大研究』新潮選書より)

上大岡や下北沢のように、地名には上下が付くものが多い。横浜市の上大岡の場合、江戸前期の元禄時代(一六八八—一七〇四)に大岡村が二つに分かれて上大岡村・下大岡村となった。このうち下大岡は明治四四(一九一一)年に横浜市に編入された際に大半が「大岡町」と改称、最終的には昭和二(一九二七)年に消滅して今は「上」だけが残っているが、このようなペアは多い。

そこではたとえば毎月四の日、すなわち四日・一四日・二四日に市を立てることができるような場所が設定され、四日市と呼ばれるようになる。このように月三回の市を三斎市(さんさいいち)と呼ぶが、これにまつわる地名は現在も多く残っている。

この他に、現代では難読となってしまったのは愛媛県西条市の朔日市(ついたち)。こちらは風伯神社の祭礼が行われる四月と七月のそれぞれ一日(朔日)に市が立ったことに由来するが、朔という字は陰暦で「月が元に戻る」という意味がある。一方で末日に市が開かれたのは晦日市(みそかいち)で、山口市米屋町はかつて晦日市と称し、毎月末日に市が開かれた。晦日はその昔からもわかるように「三十日」から来ているが、陰暦では大の月が三〇日、小の月が二九日であるため、二九日も含めた「末日」を意味している。この言葉も現代語では年の最後の晦日である「大晦日」だけが生き残った形だ。

しかし昔はそうではなかった。常に水と密接に関わってきた農民にとって微妙な地形の起伏は大きな関心事であり、それが武蔵野台地上の小さなクボ地名の多さに必然的に表れたのではないだろうか。河川改修や下水道の整備で、都市住民は何ら水に関心をもたなくても暮らしていける世の中にはなったが、数十年に一度などという集中豪雨が頻発する昨今、処理能力を超えて溢れた大量の水は、重力に従って昔の「クボ」に集まっていく。武蔵村山市では本町や中央、東大和市では桜が丘や中央といった現代風の地名がさかんに命名されてきた。クボ地名で生き残ったのは大字レベルの芋窪だけだ。地形と関係のない概念的ないわゆる**瑞祥地名**は、地形に無関心な都市住民の生活が生み出したものといってもよいだろう。

昔、先人たちは宙水地帯の窪地の浅井戸の恩恵に与(あずかり)ながらも、決してその窪地のまん中に家を建てて住むようなことはしなかった。大雨の時は水に浸かるのを知っていたからだ。

~~~~~

#### 【瑞祥・瑞象】

めでたい事のきざしとなるしるし。吉兆。

~~~~~

地番とは所有権から見た土地の最小の区分「一筆」ごとに付けられた番号であり、その地番にある家や田畑のことを指す時に、たとえば三番地と呼ぶ。だから**地番は番地**である。

地番がいつ頃できたかといえば、江戸期の検地で使われた地域もあり、また幕末の外国人居留地の番号が現在の地番につながっている例(横浜市中区山下町など)もあるが、全国的に番号が振られたのは**明治六(一八七三)年に始まった地租改正**にともなうものであった。

そこで海外の事例もふまえて研究が行われ、登場したのが「**住居表示**」である。これは従来の**地番表示とは別立てで住所を表示する**もので、あくまでも土地所有権の整理番号ゆえに「道案内」に不向きな地番から決別しようとするものだった。ストリートの左右に奇数・偶数に分けた番号—ハウスナンバーを振っていく欧米の住居表示に似た考え方を導入しようとするものだが、道路方式をいきなり導入するには、膨大な数の道路にすべて名前を付けるということが非現実的と考えたのか、「**街区方式の住居表示**」が考案され、導入が決まった。**昭和三七(一九六二)年**に「**住居表示に関する法律**」が施行され、いよいよ法に基づく住居表示の整備が始まったのである。

一八八九年、市制・町村制が実施された。

...

従来の「村」は町村制のもとで町村内の行政区画となり、これは「大字(おおあざ)」と呼ばれるように定められた。

ちなみに日野自動車と日野市の関係は逆で、**デーゼル自動車工業の日野製造所が分離独立した**ので、**地名に合わせて日野自動車と社名を変更した**ものだ。

金沢八景については駅名の命名パターンとしては珍しいもので、元禄時代に風光明媚な平潟湾を中心とする地域の名風景として「小泉の夜雨(やう)」「称名の晩鐘」「乙舳の帰帆」「洲崎の晴嵐」「瀬戸の秋月」「平潟の落雁」「野島の夕照(せきしょう)」「内川の暮雪」が金沢八景と命名されたことにより訪問者が相次ぎ、広重の浮世絵にもなった。

特定の地形だけに限らず、しかも雪や秋月、晴嵐といった季節的・時間的に限定された風景、落雁という飛ぶ鳥、それに晩鐘というサウンドスケープ要素をも取り込んだ「八景」を駅名にしたのはきわめて異例であり、また**乗客誘致の点からすれば見事な感覚**といえるだろう。

この駅名は昭和七（一九三二）年に大倉邦彦（元大倉洋紙店社長・東洋大学長。大倉財閥とは無関係）が私財を投じて建てた**大倉精神文化研究所**が丘の上にあることから大倉山と呼ばれ、駅名も同年に太尾から大倉山に変更された。パルテノン神殿を思わせるギリシア神殿風の建築は街のシンボリック的存在で、建物は一般公開され**大倉山記念館**となっている。